

伊丹市立東中学校3年
中野 智都

「療育は、少しの手間と沢山の愛情」

これは、弟の通っていた療育園の先生から卒園の際に贈られた言葉で、今でも母の心の支えとなっている。私の弟は発達障がいを持っていて、三歳から療育園に通い始めた。適切な訓練のお陰で、彼はできることが少しずつ増え、日々成長している。私も、彼が療育を受けることができ、本当に良かったと思う。

しかし、「少しの手間」と言っても、実際には専門的な知識を持った指導者や整った設備を揃える必要があり、一般的な教育の何倍もの費用がかかる。それなのに、決して裕福ではない私の家庭で、弟に手厚い支援を受けさせることができるのは、施設利用料のほとんどが、税金によってまかなわれているからだ。母は、費用が全額負担だったら、弟に療育を受けさせることができなかつたという。

もし、専門的なサポートがなかつたらと考えてみる。現在、小学校に通う弟は、放課後はデイサービスを利用している。できることが増えたとはいえ、まだまだ小さな赤ん坊以上に手がかかる時があり、学ぶべきことが多いからだ。

デイに行かず家で過ごす時間が多くなれば、私はストレスを抱えてしまうに違いない。そして、繊細な弟に私の苛立ちが伝わり彼がパニックになれば、私は罪悪感を抱えることになってしまっていたら。沢山の愛情と言えるのかどうかは分からないけれど、私が、帰宅した弟に笑顔で「おかえり」と声を掛け、穏やかな時間を一緒に過ごすことができているのは、デイを通じて、私と彼が精神的な安定を保っているからだ気付いた。母も、同じように感じているようだ。

弟は真面目な性格なので、将来的には問題なく働けるのではないかと見込まれている。だからといって、簡単に就職できる訳ではなく、周りの理解や環境作りが必要となる。

その助けとなってくれるのも、税金だ。税が投入される労働に、意味はないように思えるかもしれない。しかし、人の役に立つことで報酬を受ける喜びは、自分らしく生きていく糧となるだろう。弟は、税を納めてくれる沢山の人たちに、そのチャンスを与えてもらえるのだ。家族のみならず皆からの「沢山の愛情」で、弟の生活は支えられている。家族として、本当に感謝しかない。

障がい者に限らず、すべての人が分け隔てなく、自分らしく生きるチャンスのある世界が、この先も続いてほしい。

そのためには私には何ができるのか、しっかりと向き合っていこうと思う。

そして、大人になったとき、私も税を納めることによって、「小さな手間」と「沢山の愛情」を必要としている人の支えになりたい。